

「人文知」の再生を

経営学部教授 別所 興一



1. 「知の触媒」 としての読書指導

数学者の遠山啓によれば、学校は実用的な知識・技能の習得を主目的とする「自動車学校」タイプと、直接的には何の利益も生まない消費財としての「知」を味わい楽しむ「劇場」タイプに大別される。近年、日本の多くの大学は、生き残り戦略から「自動車学校」タイプを志向するようになり、その結果、文献や文化の研究を通して普遍的な価値を追求する「人文知」、いわゆる「教養」の内容が年々薄くなってきたように思われる。

その要因としては、最近の大学生は大学入学以前の学校では教師から与えられた知識・技能の習得だけに明け暮れて、主体的に本を読んだり、自然と人生をじっくり考察したりするトレーニングをほとんど体験できていないことが挙げられる。筆者たちの年代の高校生なら、特別の本好きでなくても課外読書として読みたい読んだ文学書や人生論・青春論などを、最近の大学生はほとんど読んでいない。いわゆる一般教養書を典拠とする文章は、高校の国語の教科書でしか接したことがない、といった学生が多くなった。

それで、何が悪いのかよ、専門学科領域の問題にとり組ませるに当たってどんな不便・不都合が生ずるのかよ、という意見が出るかもしれない。しかし、少し観察すれば、教科書と受験参考書と娯楽雑誌しか読んでこなかった学生の場合、生活体験の狭さから自己中心主義になり、他人の生活、公共の世界を思いやる知的な想像力、人間の生きざま死にぞまに対

する共感能力が、きわめて乏しいことがわかる。また、こうしたヒューマンな基礎的能力をぬきにしては、社会科学系の専門学科は成り立ちえないことは言うまでもない。それだけに「知の触媒」としての読書指導の重要性に注目する必要があると言えよう。

大切なことは、未来に希望を持たずヤル気を失いかけた若者たちに「読んでよかった」という達成感を味わうことのできるような「場」を設定することであろう。学期に1, 2冊でもよいから、本格的な古典書でなくてもよいから、学生たちの問題意識を触発するような本や文章を読ませたり、レポートを発表させたりして、目から鱗が落ちるような「発見」のよろこびを体験させたいものである。さらに、学生たちに自ら図書館に出かけて自分にとって意味のある学問情報を自分の手で検索したり、それを分析して付加価値の高い自分の納得できる情報を生産したりする訓練にとり組ませたいものである。近年、一部学生の出すレポートに、本を1冊も読まずに、インターネットの記事の切り貼りだけでやり過ごそうとする安易な傾向が見られるけれども、こうした学問的探究を怠った低レベルの「情報消費者」には、厳格に対応すべきではなかろうか。

2. 「生きることの意味」を考える本

今日の日本のように、未来という進歩の神話が破産し、目的を失った社会においては、どんなに状況が悪化しても生き延びていけるような多元的な価値観と、生き残りのためのスキルをいくつか身につけなければ、と痛切に考えるようになった。また、日々の仕事を単なる生活の手段としてではなく、自分の楽しみや生き甲斐とし、仕事もやるけれど、他の諸々

のことに手を出す、という多面的多角的な生き方を下支えしてくれるような哲学が欲しいと思うようになった。繰り延べされた未来や遠くの目的のために現在を我慢するのではなく、現在を自分のいちばん納得できるライフスタイルで過ごしたい。こうした私の欲張りな願望を満たしてくれた教育書に、つい最近めぐり逢うことができた。上野千鶴子著『サヨナラ、学校化社会』（太郎次郎社）である。今日の日本の学校教育のあり方を考える際に、一読に値する本ではなからうか。

次に、身近な地域自治体や大学が公表した巨大プロジェクトの策定経過に関心を持つようになってから遭遇した本が、山本七平著『“空気”の研究』（文藝春秋社）であった。著者の山本によれば、昭和20年春の戦艦大和の沖縄方面への特攻出撃は、軍事専門家ぞろいの海軍首脳にとって、多大な犠牲を出すだけの無謀な作戦であることが明々白々だったにも関わらず、すべての議論やデータを無視して出撃を執行したのである。その要因は、軍をとりまく当時の“空気”であった。作戦の最高責任者さえ、後年なぜそれを執行したのか一言も説明できない不可思議な拘束力を持つ“空気”であった。明治以前の日本人は、こうした“空気”への抵抗として“水を差す”ことを知っていた。昭和の戦争の悲劇の要因は、“水を差す”という平常心に基づく異議申し立てを全面的に禁圧したことにある。

こうした“空気”による日本の破滅を防止するためには、自由な思考に基づく自由な発言を保障するシステムが求められている。しかし、それには自分の精神を拘束しているものの正体を突きとめようとする探究精神、さらには現実をリアルに洞察して、“空気”による呪縛からの脱却をめざす主体的な精神の確立が必要である。それが今後の日本人の長期にわたる課題であることを、山本は訴えたかったのではなからうか。

数日前、本屋で衝動買いし、その夜に一气

読みしたのが、姜尚中著『悩む力』（集英社）である。この本は、夏目漱石とマックス・ウェーバーが約100年前に抱き、悩んだ近代社会への根源的な疑問を反芻しながら、現代社会に「生きることの意味」を考察した著書である。そこには文明が進むほどに人間の知性が断片化し、孤独感が増し、救いがたくなっていくようすが解き明かされている。でも、この生きづらい現代社会にあって、巧妙な誘惑やシニシズムに屈することなく、ひたむきに悩み苦しみながら活路を求めて努力する、その地道な精神的営みにこそ、人間の“悩む力”が結晶していることが啓示されている。

姜氏によれば、最近の若者たちの一部に、簡便な情報を入手しただけで人生とはこんなものだと浅く割りきり、よけいな心配事が生じないように、「生きることの意味」を考える読書を敬遠する傾向が認められる。特に情報技術にたけた若者たちの中には、想定外の問題にぶつかって悩むリスクを避けるために、マニュアル通りに歩く安全地帯から一歩も出ようとしない者もいる。この憂うべき傾向は、マックス・ウェーバーのいう「精神のない専門人、心情のない享楽人」に接続し、さらには上から与えられた労働に無感動に従事するワーキング・マシンに転落する恐れがある。

その打開策としては、まだ時間のゆとりのある学生時代に情報や娯楽のための読書とは別に、人文知＝教養としての読書にとり組むこと、“若年寄”的な浅知恵を排して辛抱強く情熱を持ち続けることが必要ではなからうか。それは一見道草のように見えても、人間らしい“悩む力”を高め、苦悩の彼方の歓喜に到達する道につながるのではなからうか。

最後に、私の好きな亀井勝一郎の読書論の一節を紹介したい。「書を読むは憂ひの始まり、憂ひを抱くは人間の始まり」という文言である。人間性豊かで持続可能な未来社会を築くためにも、私たちは人間的な“憂ひ”を抱き続けたいものである。